

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 伊吹泰郎

挿絵 神保玉蘭

プロローグ	一日目昼
第一章	一日目夜
第二章	二日目～五日目昼
第三章	五日目夜～六日目未明
第四章	六日目昼
エピローグ	七日目

登場人物紹介

Characters



さいおんじまなみ
西園寺愛美

世間に疎い箱入り娘のお嬢様。そのため、時に常識はずれな行動をすることも。幼い頃に交わした和馬との結婚の口約束を信じている。

たかみやかおるこ
高宮薫子

高飛車で強引なお嬢様。フリフリなドレスを好んで着用する。見た目は幼く、幼児体型。愛美同様、幼い頃の思い出から和馬に好意を寄せる。

きのさきりん
城之崎凛

愛美に仕えるメイド。毅然とした性格で武芸にも秀でているが、恋愛や性には奥手。

こんどうしおり
近藤詩織

薫子に仕えるメイド。おっとりした外見で、掴み所がない性格をしている。なぜか性体験は豊富。

うえすぎかずま
上杉和馬

一人暮らしをしている少年。両親の都合で引っ越しが多く、その際に愛美と薫子と出会った。

少年が目を丸くしている間に、メイドは主人とは反対の方向からスタスタと近寄ってきて、両手で彼の顔を捕らえた。そして接吻をするようにググッと自分の顔を降ろしてくる。

「わっ？ わっ！ うわわっ!？」

彼女の茫洋とした瞳には、催眠作用でもあるようだった。和馬は射竦められたように動けなくなり、苦もなく唇を塞がれてしまう。

ドロツとした微かな苦味が、口内へ流れ込んできた。

「んぐっ！ うっ……うぐぐっ！」

少年は生まれて初めて、口移しを体験した。そして、その強引さを思い知らされる。仰向けの格好で接吻するように液体を注がれては、嫌でも飲み下すしかない。まるで口を犯されているような気分だ。

「ごくんっ！ うっ……くっ……うぐぐう！ ふあっ!？」

詩織が離れた時、薬は異常なほどの即効性を発揮していた。和馬の手足は、早くも鉛と化したように、下へ力なく垂れてしまっている。それでいて、感覚はいつもより鋭敏になった気がした。衣服が普通に当たるだけの感触さえ、どこかむず痒いのだ。

（へ、変だ……これっ）

意識しても動かせない身体。

風邪を引いた時のように感度の増した肌。

一つだけでも落ち着かない違和感が、双方混ざり合って、少年の心を乱す。

「……お嬢様、もう離れても大丈夫なのです」

美しい口元に粘り気のある薬をこびり付かせたまま、詩織が告げた。それを受けて、薫子は「うんっ」と和馬の上からどく。

「な、何こ……れっ……！ う……っ!? うあ……っ!?」

多少舌を動かすににくいものの、少年は無理をすれば、話すことならできた。だが、その質間は途中で苦悶の呻きが変わってしまう。

股間が急速に疼いてきたのだ。竿も亀頭も不自然にムクムクと膨らみ始め、さながらボンベから空気を送られた風船のようであった。とても精力増強どころではない。

「くあっ……ああっ……ああお……っ！」

倒れたまま、和馬は少女のような顔をヒクヒクとわななかせせる。

風船は空気が入りすぎれば破裂する。彼の股間もまた、悩ましさで爆発しそうだった。

もはや、ズボンの締め付けさえもが切ない。だが、それだけでは足りなかった。できることなら、今すぐズボンの前を全開にして、自ら竿をしごき立てたい。美女と美少女に見られていて尚、恥ずかしさを浅ましい欲求が覆いつつあった。

「やめ……てえっ……」

何をされているわけでもないのに、唇を震わせて訴える。それを受けたように、詩織が

動いた。まず小瓶をテーブルに置くと、和馬の肩を掴んで「……よいしょ」と座り直させる。そして、少年の両脚の間へ身を滑り込ませて跪き、ズボンを開きにかかった。

「あっ……やっ……うあっ……！」

これから何をされてしまうのか。

和馬の内で、堪えようのない不安と羞恥心が混ざり合った。それらが、動くはずの唇から、言葉を奪ってしまう。

詩織は毛ほどの抵抗を受けることもないまま、ズボンのホックを外し、ファスナーを引き下ろした。それだけで少年のペニスは一気に軽くなる。

「ふはああああつ！ でっ、出るうううっ!？」

尿道が開放され、和馬は射精する自分の姿を鮮明に想像した。だが、実際にはまだ快感が不十分であった。感度も疼きも異常なほど増幅しているのに、絶頂への道のりまでがいっつもより遠くなっている感じである。膨らみすぎた欲望で、却って白濁液が堰き止められているようでもあった。

もっとも、それらは具体的に考えられた内容ではない。今はドロドロしたイメージが、頭の中で煮えたぎっている状態なのだ。

「はっ！ はあああつ！ だ……めええっ！ 僕っ……おかしくなるううああつ!？」
「……すぐに気持ちよくなれるのです……」

そんな言葉と共に、詩織のほっそりとした指が、和馬とソファーに挟まれていたズボン、さらにトランクス縁を摘んで持ち上げ、強引にずり下げ始める。

ズボンと下着はあつという間に両脚から抜かれ、少年の下半身は露になってしまった。

「う……………かはっ……………！」

ビクビクと痙攣する太いペニス、姿を見せる。

「うわ……………」

猪突猛進に迫ってきた薰子も、そのサイズと形状にはびっくりしたようだ。小さく声を洩らした以外は言葉もなく、不安半分興味半分といった顔で、ペニスに大きく開いた目を向けている。

「……………詩織は……………こんなデカチンポを見るのは初めてです……………」

静かな口調の詩織の頬にも、微かに朱が差している。

(み、見られて……………るううつ)

二対の視線を感じて、和馬はますます身体が火照った。あるのは単純な恥ずかしさだけではない。熱は男根へと集まり、さらにそこを膨張させているようだった。

(見られてるのにおちんちんがゾクゾクしてっ……………これじゃ僕……………変態だよお……………！)

自虐的な考えが浮かぶ。だが、どうしても疼きは止められなかった。

悶々とする彼の前で、詩織がおもむろに手を合わせる。

「……いただきます」

そう言った彼女は、ブラウスの胸を留めていたリボンへ手をかけた。シユルツと小さな衣擦れの音を立ててリボンを解いた後は、白い布地の上縁をむりやり伸ばして、グイッと引き下げる。襟やエプロン、コルセットといった他の部分はそのままだに、胸元のみがいったばいに開かれた。

「うああっ!？」

和馬の喉が震え、目が見開かれる。

メイド服の下では、無防備な乳房が息衝いていた。詩織はブラジャーを着けていなかったのだ。

「あっ……そんな……なっ……!」

今までテレビやパソコン越しにししか成熟したバストを見たことがない和馬にとって、あまりに刺激的な光景だった。加えて詩織のものは、一メートル以上もありそうなサイズを備えている。

半脱ぎの姿も艶かしく、少年は見ているだけでも息が荒くなっていった。

二つの白い膨らみは、見るからに柔らかそうで、例えるならクリームの塊だ。強く突けば、即座にふんわりと蕩けてしまいそうである。それでいて実際は、重力に負けることなく、伏せたお椀のような美しい形を保っていた。先端にはピンク色の突起が半分ほど埋ま

っている。

(触ったら……気持ち……よさそう……うつ)

和馬の中で、男としての欲望が頭をもたげた。あのふくよかなバストへ己を押し付けられ、男根の熱さが多少は癒やされるように思えるのだ。

それでも彼は残った理性を必死に総動員させて、薫子へ呼びかけた。

「薫子っ……ちゃんっ、近藤さんにこんなことさせてっ……いいの……っ!? 愛美ちゃん
と会った時は……あ、あんなに怒ってたの……っ!」

だが、それも空振りに終わる。

「うん、詩織ならいいわよっ。第一、二人がかりじゃなきゃ、和馬の好きなDVDの真似
をできないじゃないっ」

薫子の返事に迷いはなかった。

「僕はっ……あんなのが好きってわけじゃっ……あっ!」

逃げ場をなくした和馬がメイドへ顔を戻すと、彼女は手でバストをすくい上げ、上半身
をペニスへ寄せてきていた。

「こ、近藤……さあんっ……!」

頭で自分を抑えるのも限界だった。豊富な膨らみを間近に見ていると、少年の薄い胸は
内から破れてしまいそうになる。そして、ついに膨らみが男根へとあてがわれた。しかも

二つ同時に、左右から、ねっとり。

「いひっ……!?」

そこから生まれた気持ちよさは、予想を遥かに超えていた。メイドのきめ細かな白い肌は、亀頭や竿へ吸い付くようであり、軽く触れ合うだけでもゾクゾクする。さらに快感は一瞬で少年の隅々へ広がり、全身を粟立たせた。

「うああ……ああっ！ 近藤さんっ……近藤さあんっ……これっ……すごすぎるよおっ！」
和馬は助けを求めるように声を裏返らせる。

「……まだまだ……なのです」

言うなり、詩織はバストを掌で左右から押した。寄せられた膨らみは、ムニツと潰れて、竿全体と接する。

「つぁおおおぁあぁっ！」

優しかった感触に、力強さが加わった。持ち主がいじるままに形を変えるたわわな巨乳は、ゴツゴツした竿にも、亀頭のエラまわりにも、空気が入る隙間もないほどびったりフィットする。跳ね上がった密着の度合いは快楽と直結し、力が入らないはずの少年の筋肉を、ビクッと収縮させた。

「はぁっ……はぁっ……はくううっ！」

何度も痙攣を繰り返す和馬。強すぎる悦楽は、むしろ苦しくさえあった。酸欠時のよう

に頭が痺れ、喉が塞がり、全身にも脂汗が浮いてくる。

だが、詩織は容赦してくれなかった。見せ付けるように身をくねらせながら、乳房を上下に揺らし始めたのだ。

柔らかな感触が上がれば、亀頭の括れは圧迫されて、ジンジンと痺れる。下がると括れは引き伸ばされて、ますます痺れを強くする。それが繰り返されるたびに、少年の性感は否応なく高められた。詩織のバストはさながら、快楽をくみ上げるポンプのようだ。

「あっ！ おっ……やっ……！ とっ……まつ……ああっ！ ま……っ……てええっ！」

途切れ途切れに和馬が喘いでも、メイドは止まってくれない。それどころか、腰を左右に揺らしたり、胸の速度を変えたりして、男根を曲げるように刺激する。その都度、快感中枢を直接しごかれるような痺れが、和馬の股間を駆け抜けた。

「くあああっ！ ひっ……ふおっ……あ……あ、あ、ああっ……うああうっ！」

鈴口が開いた肉棒の先端は、バストが降りるたび、息継ぎでもするように胸の谷間からピヨコンピヨコンと飛び出す。その先端からは興奮を証明するカウパー腺液が溢れていた。

「……和馬様……まるでお漏らしをしているみたいなのです……んくっ」

「やっ……言わないで……よおっ！」

恥ずかしさを煽られ、和馬は自由を奪われ天井を見上げたまま、すすり泣くように哀願する。だが、詩織が言っているのは紛れもない事実だ。淫らな粘液は陰茎にも乳房にも纏

わり付き、摩擦をヌルヌルしたスムーズなものへ変えている。

「んふっ……うあ……このお漏らし……欲しいのです……う……あんううっ……」

胸を汚されたメイドは、おもむろに舌を伸ばす。その先端が濡れる亀頭へとぶつかった。

「うあああっ!？」

乳房とは違う、粘っこい柔らかさに襲われて、少年は打ち震えた。麻痺したままの首を何とか動かしてメイドを見下ろすと、

「くはああうっ!？」

彼女の姿は想像以上に卑猥だった。まず顔も身体も美しい分、パイズリなどしていると背徳的な印象が際立つ。さらにいつの間にか、乳首が柔肉からツンと盛り上がり、珠の汗が額に浮かんで、メイドの欲情が表情と裏腹に相当なものだと物語っていた。

(近藤さん……こんなに胸を熱くしてるっ……)

伏せた顔から伸びた舌の動きもいやらしく、ヒルを連想させるねちっこさで、亀頭の先端へ何度も絡み、湧き出る粘液を舐め取っている。その表面のザラつきは、細かなヤスリのように、弱い粘膜へ快感を刻み込んでいた。

「あむっ……んっ……れろろっ……んちゆるっ……ちゅばあっ」

「こんっ……どっ……さっ……ああっ!」

途切れ途切れに唸ると、名前を呼ばれたと思ったか、詩織が僅かに顔の角度を変えて、

上目遣いに見返してくる。

「いっ！」

少年の息が詰まった。

普段からどこか虚ろなメイドの瞳は、上気した頬と相まって、妖しく酔いしれているようだった。犬のように舌を突き出しているから尚更である。

「詩織の舌はどおれすか……デカチンポお……きもひいいれすかあ？ あんふっ」
聞きながら、詩織はいきなり胸を上げるスピードを速めた。

「うひいっ!?」

不意打ちめいた責めに弱いカリ首を襲われ、和馬は喘ぎを甲高くする。先ほどまでは手を伸ばしても届かなかった絶頂が、目の前に迫っているようだ。

「うあっ！ うああっ！ ぼ、ぼくうっ……おかしくなりそお……だよおっ！」

思わず喚くと、詩織は再び肉棒へ目を落とす。

「……では……あんっ……詩織はっ……もつとがんばるのれすっ……」

その言葉のままに、一層熱の籠った奉仕を展開させた。息を弾ませながら胸を往復させるのはもちろん、亀頭がへこむほど強く舌先を押し付けてきたりもする。

「あふうんっ……ふああ……とてもヌルヌルしています……うっ……舐めても……舐めても……はあふっ……止まらなふて……詩織までおかひくなりそおなのれふう……っ」

動き続ける乳房の柔らかさと、敏感な粘膜に与えられる舌の圧迫。さらに卑猥な言葉にも後押しされて、和馬の尿道の奥からは子種の塊がせり上がってきていた。

「うっ……あああっ……出うううっ!？」

反射的に叫ぶ和馬。そこから彼は、一瞬も舌を休めることなく、夢中で叫び続けた。

「出っ、出るうううっ！ 出ちゃううううううっ!？」

喋りにくいことなど関係ない。何か言葉を発してないと、気持ちよすぎて気が変になりそうだ。だが、それさえも次第に困難になってきた。ついには自分でも何を言っているのか分からない絶叫が、喉を長々と通り抜ける。

「うああっ！ あうううんっ！ はっ……つあああっ！ いっ……いくふううううっ!？」

直後、法悦は最高潮へ達した。頭の線が一本か二本切れてしまうような浮遊感が、全身を包み、目の前が真っ白になる。それはまさに『昇天』と呼ぶのがふさわしい衝撃だった。「いきひいいいいいいあああ……っ!？」

人のものですらなくなった悲鳴と共に、彼のペニスと乳房の間から飛び出さんばかりの勢いで跳ねて、先端から子種を放つ。その先にあるのは、惚けたメイドの美貌だ。

ゴピユッ！ ビビユル！ ドププウウッ！

薬で感度が増していたせいも、濁汁は濃さも量も尋常でなかった。その全てが、詩織の唇に、頬に、脛にへばりつき、重さでゆっくりと下へ垂れていく。だが、和馬はすぐにそ



愛美は横を向き、凜にも呼びかける。

「凜さんも……気持ちよくなってくださいっ……」

だが、主人の処女喪失を目の当たりにした堅物メイドは、消えそうな声で聞き返す。

「あ、あの……でも……どう……やって……」

「あふ……」愛美は小さく微笑んだ。

「わたくしを跨いで……和馬様の前に行ってください……そうすれば……っ」

それを聞き、凜の美貌が引きつった。

「そんなことっ……できません……！ お嬢様を跨ぐなど……っ」

あからさまにオロオロとする彼女を、愛美は濡れた瞳で優しく見つめた。

「そんなこと……言わないでくださいっ……。わたくし……はっ……三人で一緒に……ん

っ……気持ちよくなりた……いですっ」

そこで慈愛を感じさせつつも淫らに火照った令嬢の顔は、自分を抱く少年へ向けられた。

「和馬様もっ……う、動いてくださ……いっ……！」

「あ、うん……！」

和馬は求められるままに腰を引き、ズズッと一突き目を加えた。最初は慣らすためのソフトな動きをしたつもりだったが、愛美は大きく仰け反る。

「あはふうううっ！」

和馬も濡れ褌にペニス全体を擦り上げられて、思わず固まってしまふ。

「くああつっ！ う……はあああつっ！」

手足の筋肉を収縮させて喘ぐ少年。粘膜と粘膜の擦れ合う快感は強すぎて、きつい眩暈まで呼んだ。そんな二人の嬌声が、凜の迷いを弱めたらしい。

「んくっ……」

彼女は緩慢な動きでベッドに上がって片足を持ち上げ、愛美の胸を跨いだのである。そして和馬と向き合う形で膝立ちとなる。

艶っぽい媚態を正面から見られて、「や……っ」と凜は顔を背けた。

残念なことに、凜の身体で愛美の喘ぐ表情は隠れてしまったが、

「りっ……凜さあんっ……来てくれたのです……ね……えっ」

愛らしいよがり声まで遮られたわけではない。

（愛美ちゃんっ……どんな目で……城之崎さんの後ろ姿っ……見てるんだろ……っ）

もしかしたら、メイドのはしたない表情を想像しているのかもしれない。

「うあうっ……城之崎さんもっ……は、始めるねっ」

和馬はそう言っつて、両手を差し伸べた。凜は不安そうに目を横へ泳がせたまま、彼を待つ。右手は汗ばんだ胸へとあてがわれ、左手もスカートの裾を捲り上げた。

「ひっ……うんっ！」

ほんの軽いタッチでも、凜の反応は敏感すぎるほどに大きい。その鳴き声を聞いていると、和馬は自然と身体中がムズムズしてしまう。しかも彼の剛直は、延々と波打つ蜜壺に絡まれて、興奮の極みにある。

「あくっ……くふううあ……っ！」

じっくり味わうような襲の攻撃をペニスに加えられては、ジツとし続けことなどできない。少年は呼吸を破裂させ、膣内での往復を本気で開始した。前へつんのめると凜にぶつかるため、自然と正座に似た格好で踵を上げ、膝と足の指で身体を支えながら下半身のバネを利かせることになる。

「ふあおっ！ まなっ……ちやつ……ああふっ！」

ストロークこそ短い、その分速い。龟头も竿も肉襲と激しく擦れ合い、悩ましい伸び縮みを連続して繰り返す。出る時と入る時、悦楽は目まぐるしく形を変えた。

（駄目っ！ 愛美ちゃんっ……初めてなんでもんっ！ もっと優しくしなきゃっ！）

心を塗りつぶしそうな快楽の中で、自分へ言い聞かせる。だが声を聞く限り、愛美に苦しげな様子はなかった。

「きゃふうううっ！ かずっ……あっ……様あああつ！ 感じますううっ！ 和馬様の動いているのがっ……ああああつ！ 奥に当たってるうううっ！」

「愛美ちゃっ……あああつ！ いっ、いたっ……くああうっ！ 痛くっ……ないのっ!？」

息を切らしながら尋ねると、喘ぎ混じりの返事があった。

「はいっ！ 大丈夫ですっ……ううあっ！」

顔は見えなくても頷く気配は分かる。

「だからっ……あんっ……ああああっ！ 和馬様あっ！」

「うんっ！」

ただでさえ自制が困難な状態だったのだ。安心した和馬は一層腰を暴れさせた。膺の上
面と亀頭の上面をぶつけ合うと、敏感な粘膜の広い範囲がまとめて無数の襞にねぶられる。

（すごいいいいっ！ こんな一度にっ……気持ちいいのがたくさん当たってくるううっ！）

恍惚となりながら、少年は愛美の声にも耳を傾ける。

グッチュッ！ ズッチュッ！ ジュググッ！

かき出された愛液がシートへ飛び散るほどの激しさになっても、彼女が感じているのは
快楽のようだった。

「すごいですううっ！ ひはっ……あああっ！ わっ、わたくしいいっ……初めてなの

……にっ……こんなっ……こんなに乱れてしまっ……えひゃあああっ！」

（よおっ……し！）

好調なことに弾みをつけた和馬は、律動をそのままに、鼻先の女体も愛撫していった。
五指を広げて乳房を強めに揉みつつ、無愛想なシヨーツの中へも手を忍ばせる。

ズチユチユツ………！

「ふあああつ！」

忍ばせる、というには、触れた先の音も凜の悲鳴も大きすぎたかもしれない。それに手つき自体もすぐ、かぶさってきたスカートを派手に揺らす激しさに変わる。

凜も経験がなさそうだから、指を突っ込むまではしないものの、代わりに入り口付近を存分に弄んだ。ヌルヌルの粘液に塗れた秘唇は、どれだけ颯られてもいいと言いたげに緩み、クリトリスも簡単に探り当てられるほど膨らんでいた。さっきは愛美が手つきを真似していたために自分で愛撫しているつもりになったが、やはり直接いじってみるとその存在感は段違いである。

利き手ではない左手が股間に行ったのも、和馬が強引になった理由の一つだった。上手く動かせない分、手加減も技巧も置き去りにして、荒々しく躍るのだ。そこへ愛美のクレヴァスを挟るズンツズンツという力強い振動も伝わった。

「ひいいいっ………いひいいいっ………ひいやああうっ！　そこはっ………やめっ………えええっ………あひいいいっ！　おかしくなるうううっ！」

めちやくちやに喚く凜。活動的なポニーテールをあられもなく振り乱すことで、心ならずも自分がどれだけ感じているかを物語っている。

「はひいいいっ………やっ………身体がああつ………こんなっ………ああああんっ！」

とうとう体勢を維持できなくなったらしく、己を預けるように和馬へしがみ付いてくる。愛液もショーツの布地で吸収しきれないほどの量になって。ポタポタこぼれ、大切な主人を汚していた。

（城之崎さんっ……やっぱりエッチなことにすぐ弱い！）

そのイメージの落差は、お嬢様に見えて実は積極的だった愛美よりも大きいかもしれない。煽られた少年の情動は、手だけでなく腰遣いにも影響する。

「はっ……きあああつ！ わたくしいいっ……壊れてしまいそおっ……ですうううっ！」
グチャグチャになった幼馴染みの膣内は、かき回せばかき回すほど、ペニスを覆う快感をどこまでも膨らませてくれる。

「ま、愛美ちゃああんっ！ うああっ……気持ちいいよおおっ！ 愛美ちゃああんっ！」
「和馬様っ！ 和馬様ああっ！ かつ、かず……うっ……和馬様っ！ 和馬様ああっ！」
和馬が呼びかけると、愛美は彼の名前こそが自分の拠り所だというように、何度も答えてくる。その一方で、下の口は正気を失ったようにペニスをしゃぶり続けていた。

「はあっ！ はあっ！ はああおっ！」
際限ない悦楽と激しい律動のために、少年は身体が燃えるようだ。息が上がリ、額からも背中からも汗が噴き出す。それでも止まれず、主従の身体を同時に貪り続けた。

「いやっ……やあああつ！ てっ……手をっ……手を止め……えっ……つあああつ……も

っ、止めっ……ああああっ！ もう止めてええええっ！」

「ダメエツ！ 止めないでくださいいいっ！ もつとわたくし達をつ……んああっ……かつ、和馬様のお好きにしてくださいっ！ ああああっ！ いひあああんっ！」

内容こそ対照的だが、あらゆる絶叫になっているのは、凜も愛美も一緒だ。その響きはいかにも追い詰められたようで、絶頂が近いのをはつきりと和馬に教えてくれる。今度はさっきのように浅いものではないらしい。少年の混濁した頭では、はつきりと表現できないものの、二人からはもつと深く、ドロドロしたものが噴出しそうに感じるのである。
(ぼっ………僕………もっ！)

和馬も陰茎の根元に精液が集まるのを感じていた。一度意識した射精感は、愛美の中で往復するほど大きくなる。それこそ一突きごとに、発射のための圧力がどんどん溜め込まれていくかのようだ。だが、切羽詰った肉棒の緊張は、狂おしいほどに心地よい。

とうとう和馬は声を迸らせた。

「愛美ちゃんっ……凜さあんっ！ いっ、イクウツ！ 僕っ……イクよおおっ！」

「イッ………！ イ………くああああっ!？」

快楽に飲まれていた愛美は、少年の言葉を理解するにも一瞬の間が必要だったらしい。だが、意味を飲み込むとすぐ、嬉しげに叫び始める。

「はいいいっ！ イッてくださいいっ！ わたくしでっ………わたくしの中でイッてくださいい

いいいっ！ 子種をっ……たくさん注いでくださいいいいっ！ わたくしもっ……また熱いのが来ているんですうっ！ 和馬様の子種でっ……とどめをくださいいいいっ！」

そう頼まれると、すでに暴走気味だった肉棒や両手は、さらに加熱してしまう。

グチヨグチヨッ！ ズチウルウウッ！ ズポッズポッズポッ！

もはや、どこまでが愛美の音で、どこまでが凜の音か判別できなかった。

「うあっ!? うひああっ!? ダメエエッ！ えひいっ……ひいいいっ！ わっ、私までっ……いっ……きあああっ!? 上っ……杉いいいっ！ もお許してええええっ！」

凜も喘ぎながら、身体を大きくしならせる。その悶えっぷりが、彼女の意思とは関係なく、和馬をさらにゴールへ近づけた。

「もっ……でっ……出るっ！ 出るうううっ！」

白濁液は、すでにペニスの三分の一辺りまで這い登ってきていた。粘っこい塊で尿道を拡張された竿は、発射の前準備というように、膣内でさらに反り返ろうとする。亀頭もググッと大きく膨らむ。

「ひあはあああっ!? またっ……ああひっ！ また大きくなっていますううふっ!?」

愛美は悲鳴を上げるが、膣は決してペニスを離そうとしない。中の温度も上昇の一途だ。「うひいいいっ!? まなっ……ちやあああんっ！」

和馬にはこれ以上イクのを先延ばしすることなどできなかった。もう無理だ。

「出る出るっ……出るううううううううああああっ！」

「みっともないほど正直な宣言と共に、少年の中で最後の線が振り切れた。」

ビュルルッ！ ドブブッ！ ドパババアアッ！

ついに精液が解き放たれる。それも一回や二回ではない。ここまでの快感がすさまじかった証明のように、ペニスは敷き詰められた髪をかき分けながら、続けざまに欲望を吐き散らした。そして精液が尿道を通るごとに、和馬は最高潮に達したと思っていた快楽が、さらに爆発していくのを感じていた。射精の勢いは同時に、愛美の淫らな願いも叶える。

「うあっ……あっ……いくっ……いふひゃあああああ——ああっ！」

令嬢は子宮にとどめを刺され、メイドの股を押し上げそうなほど大きく仰け反った。

そのメイドも、硬直した親指にクリトリスを引つかかれ、強い力で和馬の頭をかき抱く。

「やっ……つあひいいいいいいいいううううっ！」

頂点へ達した主従の秘唇が、ほとんど同時にきつく収縮した。

「うはおおっ！」

和馬の口から、短く強く息が洩れる。果てたばかりの敏感なペニスを一際強く搾られ、指もきつく挟まれたのだから当然だ。腰がカクッと碎ける一方、出し尽くしたと思っていた精液は、最後の残りがドブッと発射され、駄目押しのように膣奥を再びノックした。

「きゃふうううっ!？」



舌を泳がせて敏感な襷を擦り回せば、淫液は空気と混ぜ合わされてヌチュヌチュふしだらな音を立てる。

「あっ……はひいっ!? お、音が大きすぎっ……いあああっ……駄目駄目っ駄目ええっ! そんな風に擦ったらっ……私はっ……感じすぎてっ……あああっ! お嬢様ああっ……そんな風私を見ないでくださいいいいっ!」

反応を見られないのが残念なほどのよがり声だ。割れ目も小刻みに痙攣しながら前後左右にふらつき、凜がどれだけ派手によがっているかを伝えてくる。

柔らかい舌ならば、指と違って処女膜を傷つける危険がない。そう思うから、少年のやり方は一層強引になっていく。

「あおっ……うむううっ……んぐっんぐっ……じゅぷぷっ」

口の中や周りにどれだけ愛液が落ちても構わない。凜の感じようを思うと、飲み込む間も惜しいほどで、唇の端から溢れた蜜は、頬へ向かって筋を作っている。どうしても苦しくなった瞬間だけは、舌を止めて喉を波打たせるが、それさえも焦れつつあった。

(城之崎さんにも……もつと気持ちよくなってほしいっ……うんっ……僕のできるこっ……全部やってあげるんだっ……)

とうとう和馬は頭を浮かせ、唇を直に凜へ押し当てて。啞えた襷を強く啜り出した。ジュルジュルッ……ズゾゾッ!

これまでと比較にならないほどの卑しい音が、凜の股間から迸る。

「やあああああつ!! 吸うのはっ……はひっ……す、吸うなんてっ……! きああああんっ……出てしまおうううっ!」

弱点をバキュームのように吸引されて支離滅裂に喚くメイド。確かに彼女は、愛液も感度も、陰唇の奥に隠れた粘膜も、外へ引きずり出されているようだ。

これが和馬に思いつく一番の口技だった。さらに腰も手も、限界を越えるほどに動かし続けている。

男根は蕩けた膣壁を突き上げると、表面でも芯でも熱い官能電流がビリビリと生まれる。一擦りごとに、価値観も心も法悦で粉々に碎かれ、その都度、膣の中で新たに作り直されているかのようだ。

愛美の方でも熱心に上下の往復を続けていた。

「当たっていますううっ! 和馬様あっ……ここがっ……気持ちいいんですううっ! はひいんっ! 和馬様もっ……わたくしで……えっ……いっぱい感じてくださいいいっ!」
動きやすい体位の分、感じやすい箇所を強く刺激できるらしく、彼女の腰は一定のリズムで躍っている。

一方、薫子の中では、和馬の指の動きが先ほどと違うものに変化していた。前にどこかで聞いた秘洞の敏感な場所——Gスポットのことが頭をよぎり、そこと思しき辺りを集中

的に撫で上げるのだ。

(確か……女の子の中に入ってから……お腹の方へ指を曲げた先にあつたはず……っ)

それで本当に合っているかは判断できないが、触れている場所はやや膨らんで、他と少し違う気がする。それに愛液は、薫子の体内の水分子を材料とするように止め処なく溢れてきて、掌や手首にまで流れを作っていた。少女をさらに悦ばせたい和馬は、親指でもクリトリスを転がし始める。その小さな突起を突くたび、膣は蠕動しながら指を締め付けた。

「かじゅまの指いっ……指がすごいよおおおっ！ あたしの中のっ……あちゅいところばっかり擦ってるうううっ！」

「ひあっ！ ひあああっ！ わたくしっ……もう駄目ですうううっ！ 気持ちよすぎてっ……死んでしましますうううっ！」

「きひいいいっ！ 私の熱いものがっ……全部っ……あっ、溢れてしまいうううっ！ ひあひいいいっ……止まらないいいいっ！」

壁に反響する淫靡な三重奏。だが、それを奏でる和馬の一部——右手が不意に脇から取られた。

(近藤さんっ……!?)

詩織が自分を求め出したのだと少年は悟る。相手の姿を見ることができないまま、右手

は布団の上に戻された。直後、ムワツと熱気を伴う重みが降りてくる。

「……詩織にも……してほしいのです……」

熟練のメイドの声はポソポソと小さいながら、絶叫の隙間をくぐるように、和馬の脳へ到達した。以前、彼女の目線に催眠術めいたものを感じたが、声にも不思議な強制力がある。和馬は考えるより前に、右手の中指と人差し指を束ねて、真上へ押し上げた。

ズヂュブツ！

二本が揃って高温の泉へ埋没すると、官能的なヌルつきを右手でも味わえる。

「あはうっ！ ふうう……ううんあっ！」

身体の中心から滲み出るような詩織の艶かしい呻き。左右を一度にいじっていると分かるが、薫子と詩織では秘所の構造が少し違っていた。

快楽に綻んでも尚、力いっぱい抱きついてくるようなきつさの薫子。

詩織の膺はより深く少年を堪能しようとするかぐね絡みつく。

性格の違いがそのまま表れたかと思える差だ。

しかし、それをじっくり吟味することまではできなかつた。強烈な快楽にさらされていた男根は、詩織の参加と前後して、奥に精液の気配を漂わせ始めていたのである。

（僕っ……そろそろっ……出ちゃ……うううっ！）

だが、ペースを整えたくても、身体を止められなかつた。肉棒のみならず、筋肉や神経

までが快感に支配され、半ば勝手に動いている状態だ。

(だ、駄目だあああつ！)

追い詰められた気持ち募るほど、意思に反して女陰を颯るペースは加速していく。

グチュルッ！ ジュズズッ！ グチャッ、グチャッ！

淫液が飛び散るほどの激しい抽送。

指と粘膜が四つの熱いものとぶつかり合い、解き放たれる瞬間を待つ多量の子種は、ペニスの根元へ殺到してくる。射精感天井を突き破らんばかりの勢いで高まっていった。

だが、そんな動きにさらされれば、幼馴染み達もただでは済まない。

「和馬様 ああつ……いけまつ……あああつ……許してええつ！ これではつ……わたくしだけでイッてしまいますうううつ！」

「こんなつ……待てつ……いやつ……舌がつ……ひふつ……あああつ!?」

「あああつ!? かじゅつ……うあつ……和馬あああつ！ 壊れちやうよおおつ！」

処女と処女を失って間もない三人が切羽詰った悲鳴を上げ、激しく身を振る。その中で詩織だけが違う反応を示した。

「つああつ……和馬様つ……あくんつ！ 果てて……しまいそつ……なのですわ……つ」

この経験豊富なメイドは、快楽の深みに沈みながらも、和馬の変化の意味を的確に読み取ったのである。彼女の発言は他の三人の心を捕らえた。

「イクのおっ!? かじゅまあつ……イツちゃうのおおっ!? だつたらあつ……あたひもイカへてえええつ!」

「う、上杉いっ……またっ……お嬢様に精液をつ……あああつ……お嬢様あああつ!」

薫子は和馬と一緒にイクことを望んではしたなくねだり、凜は意識する少年が主人の子宮へ射精する瞬間を想像してか、熱で浮かされたように喘ぐ。

ペニスに貫かれている愛美は、絶頂間近だった悲鳴を歓喜の声に変えた。

「和馬様あああつ! わたくしいっ……和馬様と一緒にイキますううっ! だから……ふひあああつ! 和馬様の精液をつ……精液くださいいいいっ! わたくしに注ぎ込んでくださいいいっ! ああああつ……イクッ……和馬様とイクウウッ!」

言葉だけでなく、動きも壊れたようなものに変えて、令嬢は身悶える。男根が抜けそうなほど身体を持ち上げたかと思うと、次の瞬間は一気に落として強く深く交わり直す。それを何度も繰り返すのだ。

「うぶっ……うっ……つあつ!」

ただでさえギリギリのラインにいた和馬は、悦楽で息が続かなくなり、凜から顔を引いた。しかし、官能の味を覚えてしまったメイドの身体は、追いかけるように彼へクレヴァスを押し付けてくる。

「んううううぐっ……ふむっ……ううううっ!」

肺が重くなりそうな密度の淫臭と味覚を占め尽くす愛液のしよっぱさで窒息寸前、頭が破裂しそうになった。それを引き金に、ペニスがググッと膨らむ。

(で、出るうううううううううう！)

実際に叫べない分、悲鳴は痺れる脳内で反響した。同時に愛美の膣が、猛ったペニスを先端から根元までズンッと一気にしごく。

もはや堰き止めることなど、どう足掻いても不可能だった。

(うわあああああああ——っ！)

ゴビュブッ！ ドクッ！ ピュブルルッ！

頂点へ登りつめた男根は、大切な幼馴染みの最深部で勢いよく爆ぜる。白濁はその脈打ちに押し上げられてドロドロの奔流と化し、龟头とディープキスするようにぴったり接していた子宮口へ雪崩れ打った。

「んむううううっ……うっ……うっ……ふぐうううううっ！」

逸物の根元めがけて打ち寄せた女鬘の蠢動と、外に向かう子種の噴き出し。ほんの僅かな境界を挟んで、正反対の方向へ駆け抜ける快楽の源に、少年の全身が強張った。両手の指も固まり、その弾みで埋没していた濡れ鬘の内部を強く引っかく。

直後、愛美と薰子の膣がきつく収縮し、凜の割れ目もギュッと閉じた。

「い……中……出……熱……ううああうっ！ ひっ、あひいつ、ひいつ、いあつ



……んあああああああああ——んっ！」

「かじゆっ……うひゃ……やは……ふっ……あはっ……はああっ！ きひゃああああはあああああああっ！」

「お嬢さっ……あっ……上杉いっ……上杉いっ……イクううっ！ 私もイクううっ！
イクウウうううううああああああっ！」

甲高い声、声、声。少年と接する三対の美脚も浅ましく痙攣していた。見えなくても、彼女らが達したのだと分かる。

(ああっ……三人と……一緒……)

混濁する意識の中、肉体的なものとは別の悦びがこみ上げてきた。

「ひ……ふうっ……イッ……ちや……たああ……」

薫子が力を失ったように、布団へ尻を落とす。その弾みでチュポン、と指が抜けた。

「幸せ……ですう……和馬様の……せえ……液い……わたくしの中……いっば……あい」

「はあっはあっはあっ……はひいっ……う……はあっ」

愛美はうっとり眩き、凜は息も絶え絶えだ。それらを聞きながら、和馬が全身で少女達の温もりを感じていると、ペニスを包む潤みが前へ傾いた。令嬢が倒れかけているようだ。

(あ……っ)

抱き止めてあげたいが、和馬に動かせるのは左手だけだ。代わりに凜が腰を浮かせて主

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>